

2020.01.19

「主の祈り」02

マタイによる福音書

6:11 わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

++

私たちが用いている共通口語訳による主の祈りの文によると

【私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください】と訳されています。

そして、説明文は「私たちの今日の分の食事、仕事、必要物を感謝とともに受け取れますように」

となっています。私たちの今日の食べ物（パン）だけでなく、全て今日を生きるための必要物を求める祈りでもあります。しかし、私たちは今、物質的には豊かに時代に住んでいて、こういう祈りなど不用だという空気があふれています。いつでも、どこでも、コンビニに行けば、何でも手に入る感覚があって、別に神様に祈らなくても大丈夫という過信が私たちの中にはどんどん育っているように感じます。でも、本当にそうなのでしょうか。

【私たちの日ごとの糧を与えて下さい】

実はこの祈りをせざるを得ないほど、真剣、深刻な事態の中に置かれていることを私たちは知る必要があると思います。

食料についての調査がありますが、世界の食料自給率についての数字がでています。

先進国では、カナダ 254%、オーストラリア 223%、アメリカ 130%、フランス 127%、ドイツ 95%、イギリス 63%となっており、日本の食料自給率（カロリーベース）は 37%。これは先進国の中で最低の水準となっています。（平成 25 年 2013 年）

平成 30 年（2019 年）の数値でもカロリーベース総合食料自給率は 37%です。（農林水産省の統計による）

つまり自分の国だけでは食料を供給することができないのです。

国内においても、災害などがあるとすぐに食料不足が生じる現実があります。農家の減少、そして海外からの作物輸入が増えるということは、各地で戦争や国家間の不和があれば、それが滞ることになり、

「平和外交」なくして私たちの食料をきちんと確保し続けることは難しいのです。

また、良い天気・土地の潤い・作物の生育・労働者のひとつでも欠けたら食べ物は私たちのところに回ってはいないわけです。日ごとの糧を得るために、祈ること、ていねいに平和に生きること、労働し役割を果たすことが求められているように思います。祈りは私たちの行動を変化させます。神様が祈りに応えてくださるとき、神様ご自身が見える形で動かれるというより、私たちの心に何かが届いて、私達自身が動き出すようになるのです。

その日、その日の必要物は何なのかを考えてみることは重要です。

それが満たされているなら、それは感謝するに値します。

また、食料が提供されているなら、それもまたありがたいこととして、つまり、当たり前のことではなく、感謝に値することとして受け取る必要があります。

【いただきます・ごちそうさま】

日本語の中に、食事についての、意味深い挨拶があります。「いただきます」と「ごちそうさま」です。文献によれば、それほど古くからある習慣ではないようですが、「犠牲になった食物への感謝」を気づかせる言葉が食前の挨拶として用いられています。昨今「いただきます」の挨拶の軽さがとても気になります。私たちの「日ごとの糧」のために「魚や鳥、動物、そして植物はいのちを提供してくれています。

「いただきます」の語源の中に「いのちをいただきます」という重さがあるとある学者はいます。だからこそ「ごちそうさまでした」という言葉が対になってでてくるわけです。そこには食物への感謝、いただけることへの感謝・感激があります。

それが軽視されている世界には「いのちへの畏敬は育ちにくい」さらに言えば「神への感謝も育ちにくい」かもしれません。

日曜学校の時代に覚えた賛美歌の中に「我らの食事を主よ、祝し給え、御国にてともに食するときまで」というのがあります。定形の祈りの中にも「主よ、罪の赦しと日ごとのパンを感謝します」とか「父な

る神様、あなたのいつくしみに感謝して、この食事をいただきます。ここに用意されたものを祝福し、わたしたちの心とからだを支える糧としてください。わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン。」

というがあります。

いずれにしても、与えられた食事が、決して当たり前のものではないことを自覚するための告白がここにはあるのです。そういう感謝の心も含めて、ていねいに祈りたいものです。

その部分が枯渇してくると、食物の不足だけでなく、もっと深刻な困窮が始まる可能性があるからです。旧約聖書アモス書8章の言葉です。

8:11 見よ、その日が来ればと主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく水に渴くことでもなく主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渴きだ。

8:12 人々は海から海へと巡り北から東へとよるめき歩いて主の言葉を探し求めるが見いだすことはできない。」

霊的な困窮は深刻な出来事です。人の心が渴き、愛が冷えるからです。飽食の時代に対する警告です

「私たちの日ごとの糧を与えて下さい」

現状においては、この国で食料確保のためにも、「戦争や紛争、国家間の不和がありませんように」「災害や日照不足、海流の温暖化などがひどくなりませんように」

「与えられた食物を感謝とともにきちんといただきますように」

「食事を与えられていない人たち、子どもたちが何とか食料を得ることができますように」という祈りはとても大切です。

小学生への調査で、こんな結果が出ています。

朝食を「毎日食べる」は84.8%、「どちらかといえば食べる」が9.7%、「あまり食べていない」が4.1%、「全く食べていない」が1.4%。15%を超える小学生が、朝食を毎日食べる習慣が身に付いていない。(日本家政学会誌/2013年)

これらの子供の中には「食べたくない」という子供もいるけれど、食べたいけれど食べられない、食べたいけれど誰も用意してくれない、というケースも

少なくない」彼らの日ごとの糧が提供されますようにと祈り、協力することは必要ですね。

「私たちの日ごとの糧を今日もお与え下さい」

「私たちの今日のための必要物を与えて下さい」

これは実は、「自分のいのちと向き合う祈り」

「自分の命を大切にするための意識を持つための祈り」でもあるのです。

衣食住、すべての必要が満たされていると感じられるなら、それは幸せなことです。

感謝の不足はないでしょうか。衣食住で事足りてない人たちの存在を忘れることがないようにしたものです。

日ごとの糧は「仮に自分で作るにしても、自分以外の他者からの供給や提供がなければ手に入らない」という現実を考える時、自分の生き方の中に

「平和を求める心」「与えられたものへの感謝」

「食物へのていねいな理解と取り扱い」があるかどうかを吟味する必要があると思います。

実は、私たちはそれぞれ、いつ、炊き出しの食事を受ける状況になるか、誰にもわからないからです。

神は必要物を供給しようとしておられるわけですが、それを私たちが当たり前のこととして受け取り続ける姿勢は改める必要があると思う。食べすぎも、偏食も、本来は、この祈りの筋から言えば間違っています。

アレルギーがあって食べられないという人もいるでしょう。しかし、基本的には食料として提供されているものを神様から、そして多くの人達の犠牲や動植物のいのちの提供によってもたらされていることを知り、感謝しつつ食する習慣は、とても大切なことだと思います。

人を謙遜にする最初の一步でもあると思います。